2024 年 6 月 26 日

ティーチング・ポートフォリオ

幼児保育学科
鈴木寛康

① 教育の責任

私は、幼稚園教諭及び保育士養成における健康・体育分野の科目を担当し、個人の経験に加えて客観的情報にも基づき根拠を持って運動遊びや健康教育を実践する能力と、他者と協働して目標を達成する能力の習得を目指している。特別研究においては、テーマ設定、方法の検討、結論の導き方を指導し、論理的に説明する能力を養うことを目指している。担当科目の多くは演習、実技形式であり、学生が積極的に話し合い、理論と実体験を結びつけて学びを深められるようにしている。

課外活動においては、高大連携事業として、高校生に対する高大接続に資する企画の立案、実施を担当している。地域連携活動では、地域で行われている活動を教育の機会と捉え、学生が参加するための交渉、企画、準備、実施を担当している。幼児体育指導者検定とキッズリーダー養成講習会では、担当科目やスマイルチャレンジと関連付け、それぞれ 2 日間という短期間での検定合格という見かけ上の実力にとどまらず、各技術の目的やコツの理解を促進し指導力の定着を目指している。サークル活動では、各種スポーツや野外活動を通してメンタルヘルスを維持・向上し、良好な人間関係の構築の価値を体験できるよう心がけている。

担当する科目及び課外活動は以下の通りである。

【担当科目】	概　　要
子どもの生活と運動遊び Ⅰ （1 年生後期）	保育士資格を取得するための必修科目である。 幼児の発育・発達の基礎を学び、教員が展開する運動遊びの体験を通して、基礎知識や技術の理解を深めることを目的としている。
子どもの生活と運動遊び Ⅱ （2 年生前期）	保育士資格を取得するための必修科目である。 運動遊び Ⅰ での学びを踏まえ、学生がグループとなり運動遊びの指導案の作成、活動の実践、振り返りを行い、仲間と協働して運動遊びの実践力を養うことを目的としている。
体育講義 （2 年生前期）	幼稚園教諭二種免許、保育士資格を取得するための必修科目である。 学生自身が社会人としてそして保育者として生き生きとした生活を送る上での基本である健康の維持・増進について、生活習慣、運動の方法、ケガに対する応急処置などの理解を深めることを目的としている。

体育実技 （2 年生通年）	幼稚園教諭二種免許、保育士資格を取得するための必修科目である。 様々なスポーツ種目を体験する中で、勝敗や運動の巧拙だけでなく、うまく行かないことへの向き合い方や仲間と支え合うことの大切さといった態度・価値観を醸成し、生涯にわたって運動に親しみ、心身ともに健康的な生活を送るために必要な知識・技術を取捨選択できるようになることを目指している。また、青森県の積雪環境とスキー場まで大学から 20 分という立地を活かしてスノーボードの集中授業も行なっている。免許・資格の必修科目であることから、上記の態度・価値観や知識・技術を、保育活動との関係性を意識した伝え方もしている。
保育と青森（健康） （1 年生前期）	卒業必修科目であり、幼稚園教諭二種免許、保育士資格を取得するための必修科目でもある。 健康の概念と子どもの心身の発育・発達について解説し、領域「健康」のねらいと内容、基本的生活習慣の形成、安全教育について理解を深めることを目的としている。
保育実践と青森（健康） （1 年生後期）	幼稚園教諭二種免許、保育士資格を取得するための必修科目である。 保育と青森（健康）での学びを踏まえ、基本的生活習慣の形成や運動遊びについて、指導案の作成、活動の実践、振り返りを行い、健康教育の実践力を養うことを目的としている。
教職実践演習（幼稚園） （2 年生後期）	幼稚園教諭二種免許を取得するための必修科目である。 入学以来学んできた知識や技術を振り返り、自らの課題を確認する。その上で、グループで模擬授業の指導案作成、活動の実践、振り返りを行い、保育実践力を高めることを目的としている。
特別研究 （2 年生通年）	卒業必修科目であり、保育士資格を取得するための必修科目でもある。 個人あるいは 3 人以内のグループで保育に関わる課題からテーマを設定し、調査、分析、考察をして結論を導く。論文を作成し口頭発表をすることで、根拠を持ってわかりやすく相手に伝える力を養うことを目的としている。

【課外活動】	
高大連携事業	高大接続改革実行プランにおける学びの三要素を養うことを目的とし、県内高校と連携して事業を実施している。 これまでに、「絵本の食べ物作ってみよう！」「食育絵本づくり。」などを、高校生と大学生が協働して企画し、附属幼稚園児を対象に実施した。その他、高校の探究授業への本学教員によるサポートや出前授業なども企画、調整を行なった。
地域連携活動	1）連携協定先である東北町の町立図書館が実施している「おなはしコンサート」に学生が参加できるように、企画の提案、調整を行なった。 参加親子に対する絵本の読み聞かせを通して、意図を持った選書、準備、実施、振り返りの大切さを学ぶ機会とした。 2)日本自動車連盟（JAF）と連携し、本学学生と高校生が協働して幼稚園児に対して交通安全教室「JAF ドレミグループ」を実施するための、企画の提案、調整、指導を行なった。 交通安全教室で使用する車や横断歩道の制作、演じる台本の構成、練習、本番を通して、協働することや自分の役割を果たす大切さを学ぶ機会とした。
幼児体育指導者検定	公益財団法人日本幼少年体育協会が認定している「幼児体育指導者２・３級」検定について、事前練習会の実施や担当科目である子どもの生活と運動遊びⅠに実技検定内容を取り入れるなどし、各技術の目的やコツの理解を促進し指導力の定着を目的としている。
キッズリーダー養成講習会（U-8/U-10）	公益財団法人日本サッカー協会が認定している、10 歳以下の子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝える指導者の要請を目的にした講習会に関して、担当科目である子どもの生活と運動遊びⅠ・Ⅱでの学習内容と関連づけて理解ができるように事前指導を行い、指導力の向上を図っている。
スマイル・チャレンジ	上記キッズリーダー取得者を対象に、2 日間の講習で学んだ内容を、実践を通して理解を深め指導力として定着できるように、本学附属第一幼稚園の年長児を対象に、運動遊びの実践指導の経験を積む場と

	して実施している。この活動の中で、日本サッカー協会のインストラクターと協働し、講義や指導計画立案のアドバイスを行なっている。また、活動を撮影した動画を用いてフィードバックも行い、指導力の向上を図っている。
運動アクティビティサークル「Cheerful」	週１回の学内でのスポーツ活動と週末や空き時間を活用したボルダリング、スノーボード、キャンプなどの学外活動を通して、多忙な保育者養成カリキュナムの中でもメンタルヘルスを維持・向上し、良好な人間関係を構築する体験ができることを心がけている。

② 教育の理念

私は、保育者としての専門的知識や技術を学ぶことにとどまらず、「自らの考えを発信し、他の意見を尊重し、良好かつ合目的な人間関係を作ることができる。」、「現象を理解するため、説明するために、学んだ知識を活用できる。」、「客観的、分析的視点を持ち、論理的根拠を持った仕事ができる。」といった視点から、保育の技能を高める努力ができる保育者に育ってほしいと考えている。

私自身は幼稚園から小学校低学年まで運動が苦手であり、運動会のかけっこでは次の組の１位と間違われるほどのビリで、友人との遊びで運動遊びになると逃げ出したくなる思いでいた。しかし、小学校高学年時の担任の先生に出会い、その先生との会話が楽しく、また頑張りを褒めてもらえることで先生についていきたいという思いが芽生え、体育や運動遊びに夢中で取り組んだ。その結果、6 年生では、市の小学校体育大会で 100m 走の選手となることになった。この経験は、体育教師となるにあたり、学校体育において運動能力の巧拙やその向上だけに視点を向けるのではなく、子どもの気持ちに視点を向ける大切さに気づくきっかけとなった。このような経験などから、理論的に正しいことを伝えるだけでなく、子どもの気持ちに視点を向け気持ちが前向きに動くように関わることによって、子どもは積極的に活動に取り組むようになり、その結果運動での成功体験を得て自信に繋がるという今の自分の授業に向かう考え方の基礎となった。また、サッカーのナショナルトレーニングセンターでのトレーニング指導の経験からは、テキストから得た専門知識やトレーニング技術はそのまま誰にでも有効になるわけではなく、対象者のニーズや身体的・心理的状態によって取捨選択し工夫しなければ、成果をあげることはできないということを学んだ。

学校での学びは、ともすると暗記型、方法収集型になりがちであり、それが学びと解釈してしまうことが少なくない。しかしながら、保育者の仕事においては、覚えた知識や方法を目の前の子ども一人ひとりあるいはクラスの特徴に合わせて、取捨選択や工夫し発信する技能が求められる。この技能を獲得することは容易いことではないが、その技能が発揮され有効に働いたときに得られる子どもたちの成功体験と笑顔は、保育者自身の努力の結果得られる最高の成果となると考えている。この成果を目指して努力できる保育者を育てたいと考えている。

③教育の方法

・グループ活動を通した学び

質の高い学びを得るためには、学生が個別に努力するだけでなく、他者に対して自分の考えを発信し、他者の考えから学ぶことも有効である。さらに、学んだ内容を他者に説明するという出力の機会は、学びを解釈し定着させるために有効である。そこで、担当科目全てで「Learning in Teaching：LITE（ライト）」という手法を取り入れている。この方法は、授業で学んだ内容をグループの学生相手に説明する、つまり「教えることで学ぶ」というものである。相手に伝わるように説明するには、学習内容を記憶するだけでなく、相手に伝わるように言葉を選び教材を選び伝える必要がある。これは、保育者として、子ども、保護者、同僚とコミュニケーションを取る場面を想定して実施している。さらに、クラス全員の前に立ち、授業内容についてのプレゼンテーションも行っている。これにより、緊張感のある状況でも相手に伝わるように説明するという、より実践場面を想定した学びの機会としている。

運動遊びⅡと保育実践と青森（健康）での模擬保育の発表にあたっては、クラスをいくつかのグループに分け事前の計画、準備の話し合いを密に行う時間を設けている。ここでは、私自身もグループを回り学生の意見を聞き、議論の停滞を少なくするように努めている。授業時間外でもグループでの話し合いや情報共有が円滑になるように、Microsoft Teams のグループチャット機能を活用し、意見交換や資料の共有ができるように指導している。発表本番では、各グループの先生役を発表直前にくじ引きで決めることにしており、誰が先生役になっても計画に沿った授業の展開ができるように、各自が自分ごととして準備に取り組む状況を設定している。

体育実技では集中授業としてスノーボードを採用している。90%以上が未経験で不安感や恐怖感の大きい状況で、仲間と励まし合い教え合いながら難しい技術や厳しい環境に向き合い乗り越え、達成感を共有する機会としている。

・視聴覚教材の活用

保育者は子どもの運動遊びを展開するにあたり、個人差の大きい子どもの集団を相手に保育者の設定したねらいに向けた指導をすることになる。そのような場面を想定した実体験として、体育実技の授業においても学生一人ひとりの運動能力の個人差に合わせた指導を通して成功体験を積めるようにしている。そのために、運動学的、運動力学的視点からどのような動きになっているのか、どのように力が働いていると考えられるかを示すことは有効であると考えている。しかし、授業や教科書から得た文字や図、写真を主体とした知識や技術では詳細に理解することは難しいことが多い。そこで、タブレット端末を用いて撮影したスローモーション映像や、3DCG を用いた人体解剖学のアプリ、動作分析アプリを活用し、運動学的、運動力学的要素を理解できるようにしている。加えて、対象となる運動をした時に生じる感覚について問いかけ言語化させることで、実際の運動、動画やアプリを用いた客観的視点、そして運動感覚を組み合わせて運動理解の促進を図っている。

・動画撮影機器の活用

運動遊びⅠでの鬼ごっこや雪あそびなど、人が入り乱れて行われたり広いグラウンドで行われ

たりする活動を動画撮影する際に、360 度カメラを使用している。これまでは通常のビデオカメラを使用してきたが、自分自身がレンズを向けた画角に収まる状況しか記録することができなかった。360 度カメラを用いることで活動全体を動画に収めることができ、活動後に PC で全体を確認した上で、授業で活用できる場面を選んで保存することが可能になった。

運動遊びⅡと保育実践と青森（健康）での模擬授業の実践では、子ども役が大きな声を出したり走り回ったりすることや保育者役とビデオカメラの位置が離れることで、保育者役の発言内容が聞き取りにくい動画になる。そこで、保育者役の学生にワイヤレスマイクを装着して音声を録音し撮影した動画と編集で同期させることで、模擬授業を通して保育者がどのような場面でどのような発言（関わり）をしたのかをわかりやすくして学生に共有することが可能になった。

・リアクションノートを用いた学び

子どものやる気を引き出し成功体験に導き自信につなげる保育を行うためには、活動中の心の動きを考えることが不可欠である。そこで、運動遊びⅠ・Ⅱ、保育と青森（健康）、保育実践と青森（健康）、体育実技、体育講義において、どのような感情が生じたか、その感情が授業が進むにつれてどのように変化したのかをリアクションノートに記録するように指導している。さらに、自分以外の学生はどのような感情であったと考えられるかを想像することも求め、同じ遊びの中で生じる多様な感情を記録するように指導している。このように体験と感情を結びつけることで、運動遊びを計画する際にどのような感情が生じ得るかを想像し、ねらいの達成に向けた工夫の足がかりになるようにしている。

また、授業では一斉指導となるため、理解度に個人差が生じる。そこで、リアクションノートに感想や質問を記入することを促し必要に応じて回答を記入することで、個別に対応できるようにしている。

現在は、紙のノートから Microsoft OneNote に切り替えることで双方向性と即時性の向上と効率化を図っている。

・実技試験、筆記試験を通した学び

実技試験は、運動遊びⅠ・Ⅱ、保育実践と青森（健康）、体育実技で実施している。

運動遊びⅠでは、マット運動（前転・後転・前転補助・後転補助）となっている。これは、幼児体育指導者検定の実技内容と同様のもので、見本としての正確さ、コツをわかりやすく表現する、安全確保の技術を定着させるために実施している。

運動遊びⅡでは、運動遊びの模擬授業となっている。グループごとに話し合いから計画を立て、模擬授業を行う。模擬授業実施直前に保育者役を決めることにしており、誰が保育者役になってもグループで意図した授業となるように当事者意識を持って準備に取り組むことを求めている。

保育実践と青森（健康）では、基本的生活習慣の形成をねらいとした模擬授業となっている。進め方は運動遊びⅡと同様である。

体育実技では、５種類の運動課題を設定している。当科目は保育士資格、幼稚園教諭二種免許取得の必修科目にもなっていることから、保育場面において運動や保育者への興味・関心を引き出すことへの活用も意図して、各種スポーツの主要な技術ではなくコツを掴み調整力を発揮すれ

ば成功する、道具やボールを扱う技を採用している。例として 3 種目の写真を示す。残り 2 種目は、床に置いたバドミントンのシャトルをラケットで拾い上げる課題（10 回中 5 回成功）と、バドミントンコートでネットの向こう側から打ち出されたシャトルをラケットでキャッチする課題（10 回中 5 回成功）である。

バドミントンの 2 課題は授業最終回の時間内に同時に 5 人ずつ実施し、緊張する状況でも運動パフォーマンスを発揮できるかを試す課題としている。残りの 3 課題は、授業最終回までに何度でもチャレンジできることとし、成功するまで継続して取り組む課題としている。

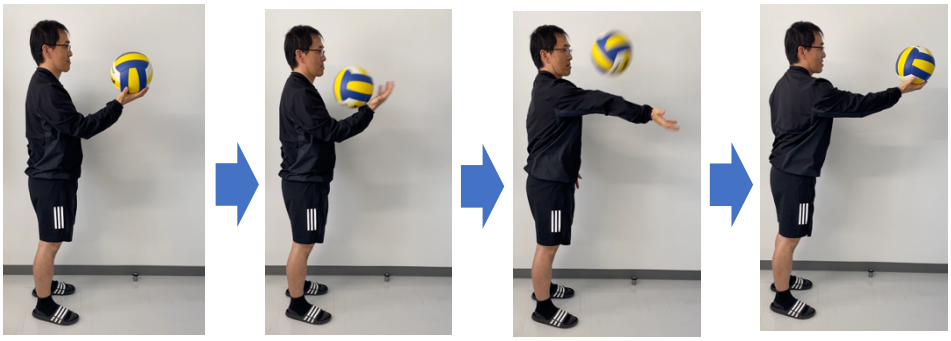

写真 1 ひじポン課題 歩きながら 4 回

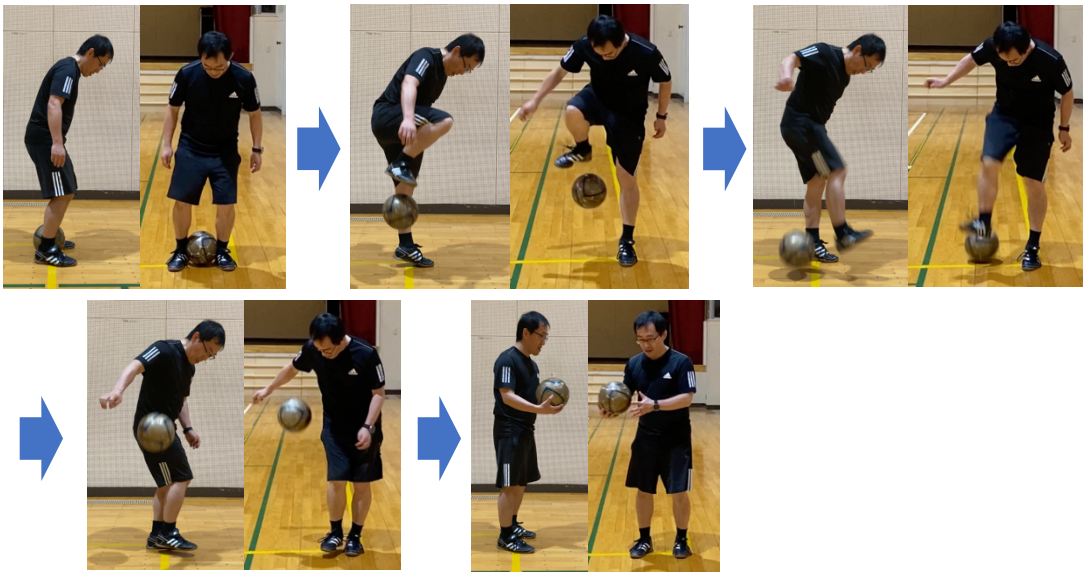

写真 2 かかとポン課題 3 回連続成功

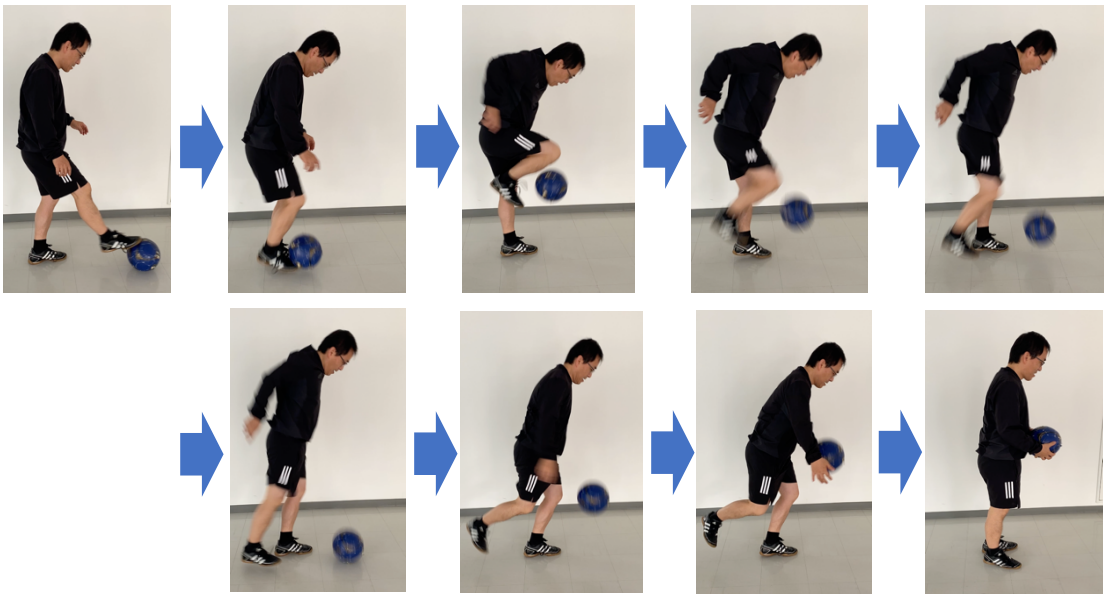

写真 3 ひざポン課題 3 回連続成功

実技試験に臨む準備の過程として、どのような運動課題なのか、どのようなコツがあるのかを撮影した動画なども活用して説明し体験させ、合格するために必要な視点について理解を促し、それを学生同士で教え合うことで、全員で合格しようという雰囲気の醸成に努めている。

筆記試験では、授業内容について説明を求める問題を取り入れている。単に記憶の再現でなく、記憶したことを他者にわかりやすく自分の言葉で説明する力の向上を目指すことで、保育活動をする際の説得力の向上をねらっている。

④教育の成果

・グループ活動を通した学びについて

学生からの直接の感想やリアクションノートによる感想では、LITE について、「人に説明することが苦手なので最初は嫌だなと思ったが、相手がちゃんと聞いてくれたり、伝わらなかったことを聞き返してくれて理解してくれたりしてうれしかった。」、「クラス全員の前に立っての発表ではとても緊張したけれども、やってみていい経験になった、また挑戦してみたいと思った。」という意見があった。

模擬保育の発表に向けた計画、準備については、「仲間と協力してやることで色々な意見が出て参考になった。」、「仲間が協力してくれたので、準備がスムーズだった。」、「色々な意見が出るので、1 つに絞り込んで決めるということが大変なんだということがわかった。」、「先生役に当たってすごく緊張したが、終わってみてこれが仕事なんだと思い、いい経験になったしまたチャレンジしたいと思った。」という意見があった。

スノーボード集中授業については、「スノーボードがあると聞いた時から絶対できないと思ったし当日も行きたくなくてしょうがなかったですが、コツを教わりながら少しずつチャレンジしたら、午後には 1 度も転ばずにサイドスリップで降りてこられるようになり驚きました。何事もできないと決めつけるのではなく、チャレンジすることって大事なんだなと気付かされました。」、

「怪我をしたらどうしようと怖くてしかたなかったですが、班のみんなと声をかけ合いながら先生の教えてくれるコツを必死にやっていたら、少しずつ滑れるようになって楽しくなりました。スノーボードを趣味にしたいと思いました。」、「サイドスリップは下のエスカレーターに乗れればできると先生が言った時は全然信じていませんでしたが、今はわかる気がします。コツを知ることと例えて話すことは大事だなと思いました。」という意見があった。

・視聴覚教材を用いた学びについて

学生からの感想では、スローモーション映像を用いた説明では、「スローモーションで動きをゆっくり見ることができたので、コツがわかりやすかった。」、「実際の運動では見えないところが見えて面白かった。」「自分のスマホでも撮れるので使ってみようと思う。」という意見があった。3DCG を用いた説明では、「普通見ることができない体の中を見ることができ、体の作りや動きをわかりやすく見ることができた。」という意見があった。動作解析アプリを用いた説明では、「目では分からない微妙な違いを、角度の表示で見ることができてわかりやすかった。」、「２つの動画を並べてみることができるので、違いが分かりやすかった。」という意見があった。

・動画撮影機器の活用について

360 度カメラ映像を見た学生からの感想では、「今までよりも広い範囲が見られるので、自分に見えないところでどんなことが起きていたのかを知ることができたし、360 度カメラってすごいなと思った。」、「映っている自分だけじゃなくその場の活動がたくさん映るので、わかりやすいしエモい（心に残る・印象的な）動画だなと思った。」という意見があった。

ワイヤレスマイクを使用した模擬授業動画を見た学生の感想では、「今までは先生役の声がかき消されて何を言っているのかわからないことがあったので、見る気にならないこともあったけど、先生役の声がしっかり聞こえるので、たくさんの気づきがあった。」、「先生役をやったけど、緊張もあって正直終わった後に自分が何を言ったのかを完全には覚えていないので、後から動画を見てしっかり自分の声が入っていることで、あの時こう思ったとか、これじゃ指示が通らないよな、とか振り返ることができた。」という意見であった。

・リアクションノートを用いた学びについて

学生からの感想では、「後から振り返ることができるので、教育実習で指導案を書くときに自分の気持ちまで振り返って計画することができ、役立った。」、「自分のわからないことを先生に質問できて先生が答えをノートに書いてくれるのでうれしかった。」「OneNote だと自分が記入したものを先生がパソコンで見られるので、わざわざ研究室まで提出しに行く必要がなくてよかった。」という意見があった。

・実技試験、筆記試験を用いた学びについて

学生からの感想では、実技試験のうち、子どもの生活と運動遊びⅠのマット運動と体育実技の５種類の運動課題では、「コツを教えてもらった瞬間成功できたので、すごいと思ったしコツを知るって大事だなと思った。」、「仲間がアドバイスをくれたり練習に付き合ってくれたりして助けて

もらった。仲間の大切さがわかった。私も人を支えられる人になりたい。」、「自信もなく緊張で逃げ出したくなったが、合格することができ達成感が半端なかった。」という意見があった。

子どもの生活と運動遊びⅡと保育実践と青森（健康）の模擬授業では、「グループの仲間と意見をまとめるのが大変だったが、その必要性もわかった。」、「自分が先生役に当たるつもりで緊張しながら準備した。」、「実際本番まではやりたくない気持ちが強かったが、先生役を終えてみてすごく良い経験ができたと思う。またチャレンジしたいと思った。」という意見があった。

筆記試験では、「限られたスペースにわかりやすくまとめるのが難しかった。」、「頭でわかっているつもりでも、説明するとなると理解できてないということを思い知った。」という意見があった。

以上のことから、これらの方法を通して、「動画なども活用して運動を観察し、コツを理解することの大切さ。」、「感情の動きに気づくこと。」、「具体的な準備を継続的に行うこと。」、「他者と協働して学びを得ること。」、「ただ記憶するだけではない理解を深めること。」、「他者にわかるように伝え方を工夫し、まとめ伝えること。」の理解を深める方向に向かえていると考えている。

⑤今後の目標

教育の責任や理念に基づき方法を選択し工夫して教育にあたっているが、その成果は担当した学生全員にもたらさえたとは言えない。学生一人ひとりの状況を把握し、より多くの学生がより良い成果を得られるように授業を改善していきたい。そのために、担当する科目や活動についての私自身の理解をより深めること、生活様式の変化や技術の進歩にアンテナを張り、より良い授業、活動となるよう工夫することを常に意識して取り組んでいきたい。